



Title	「が」と「は」 : PartII
Author(s)	高野, 泰邦
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.11, p.23-41; 2003
Issue Date	2003-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/5595
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-24T20:15:57Z

「が」と「は」

Part II

高野 泰邦

[キーワード]：文法関係、表層格助詞、機能助詞、文文法、談話文法、形而上学的文法

1. はじめに

Part I では、日本語の統語構造において最も重要な働きを担っている2つの助詞、「が」と「は」について、大胆かつ魅力的な仮説を提案した。その記憶を新たにするため、この仮説を再びここに掲げて論を展開していくことにする。

「が」と「は」についての仮説

- (a) 「が」の基本的な機能は、文の主語をマークすること。また、「が」はある種の文の主語を含めた句をマークする焦点という機能もある。この焦点をマークする「が」は、句の他に、ある複文の節もマークする。
- (b) これに対し、「は」の基本的な機能は、文のトピックをマークすること。総称をマークする「は」および対比をマークする「は」は、トピックの「は」の特殊なケースである。もう1つ認知しなければならない機能は、強調をマークする「は」である。

Part II では、この仮説が実に正しいものであり、普遍性を訴える魅力的な仮説として維持できるということを論証していきたい。この仮説が事実正論であるということを立証するために、本稿では言語学的根拠を基に3つの議論を展開していくことにする。それらの議論は、「機能助詞」、「形而上学的文法」、および「曖昧さに対する説明能力」である。

「機能助詞」については、新しいタイプの概念、つまり、「機能助詞」というものが日本語の「が」および「は」を含む統語論上の構造を説明するのに必要である、ということを主張する。その根拠は、これまでの日本語の研究におい

て展開されてきた「文法関係」および「表層格助詞」という2つの概念はもちろん重要であり、言語を分析する際に必要な概念であるが、必要十分な条件ではない、ということをも裏付けるためである。

「形而上学的文法」については、これまでに（特に）言語学の分野の研究において中核的役割を担ってきた「文法」および「談話文法」という文法枠組みを表す概念は必要であるが、必要十分な条件ではなく、これらの2つの文法の枠組みに加えて、新しいタイプの文法枠組みをそれらの2つの枠組みと並行して持つことによって、日本語における「が」および「は」の統語論上の構造をより整合性を持って説明することが可能である、という議論を展開していく。

「曖昧さに対する説明能力」についても、これまで日本語の「が」と「は」に対してより整合性のある説明ができなかった構文（例えば、「が」や「は」にまつわる曖昧さ）を取り上げ、本稿の枠組みではそれらの構文に対して整合性のある説明が可能である、という議論を展開していく。

それでは、さっそく本論に入ることにしよう。

2. 機能助詞（文法関係と表層格助詞の枠組みを超えて）

英語における文法関係は、基本的に語順によって決定される。（この原則に従わない例（例えば、[he-him, she-her]などの代名詞）も存在するが、これは本稿が目指そうとしている議論から逸れることになるので、ここでは特に取り扱わないことにする。）例えば、主語という文法関係は通常文頭に現れるし、目的語という文法関係は他動詞の後に現れるし、間接目的語という文法関係は（直接）目的語の後に現れる、と言った具合である。このような文法関係は、日本語のような言語では基本的に助詞で表されると言ってよいだろう。日本語において「かきまぜ現象」が頻繁に見られるという事実は恐らくこの理由に拠るところが大きいのではないだろうか。しかし、ことの成り行きはそんなに単純ではなさそうだ。

本節では、以下のように議論を展開する。まず、文法関係および表層格助詞¹⁾という文法概念は「が」および「は」を含む日本語の統語構造を分析する際に必要ではあるが、「が」および「は」を含むより多くの統語構造を的確に、しかも、整合性を持って説明するには必要十分な条件ではないということをも主張する。更に、この欠陥を補う目的で新しいタイプの文法概念（つまり、「機能助詞」）の必要性を主張する。しかし、本節の議論では Part I で取り上げられた例文に

加えて数に限りのある新しい例文だけを対象とする。

それではさっそく日本語における主語とは一体何なのかという議論から切り出すことにしよう。日本語における主語とは一体何なのかということに関して、最初に明快な解答を提案したのは、Shibatani [20] である。Shibatani (1978: P.57) によれば、「主語とは、尊敬語化を誘発する名詞句である。」(“a subject is an NP that functions as a trigger for the sonkeigo process” [subject honorification---YT])。Shibatani のこの基準によれば、次の各(b)の例文の中の下線を施した句は、敬語化を誘発するので主語と見なされる。

- (1) a. 鈴木さんがそう言いました。
b. 鈴木さんがそうおっしゃいました
- (2) a. 山田さんは小説を書いています。
b. 山田さんは小説をお書きになっています。
- (3) a. 先生にマジックができます。
b. 先生にマジックがおできになります。
- (4) a. 田中さんの創った芸術作品
b. 田中さんのお創りになった芸術作品
- (5) a. お隣さんもパーティに来ました。
b. お隣さんもパーティにいらっしゃいました。

(1)bは、主語をマークする「が」でマークされた「鈴木さん」が（当然のことながら）尊敬語化を誘発していることを示している。一方、(2)b-(5)bは（番号順で）それぞれ「は」、「に」、「の」、「も」という助詞でマークされた句にもかわらず尊敬語化を誘発しているので、それらの句は全て主語であるということを示している。これらの例で一体何を示そうとしているのかと云えば、「文法関係」という用語と「表層格助詞」という用語は統語論上違うものであり、日本語の文構造を分析する際にそれらの用語をはっきりと使い分ける必要があるということを示そうとしているのである。

しかし、ここで注目していただきたいことは、これらの2つの文法概念（つまり、文法関係および表層格助詞）は日本語の統語構造について整合性のある説明をするという観点からは必要十分な条件ではないということだ。もっと核心を突いて言うならば、焦点をマークする「が」、トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、対比をマークする「は」などの助詞を1つのグループに分類した、仮称「機能助詞」という文法概念を、現存の2つの文法概念と共に平行した形で用いることによって、日本語の「が」と「は」を含む統語構造を明らかにしようというわけだ。この考え方は以下のように3つの相互関係を持つ形として表現できる。

- a. 文法関係：主語、（直接）目的語、間接目的語など
- b. 表層格助詞：主格、対格、与格、など
- c. 機能助詞：トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、対比をマークする「は」、焦点をマークする「が」、「だけ」、「さえ」、「も」など

過去の分析ではこの点に関して混乱が生じていたということを敢えてここに指摘しておきたい。特にこの点をはっきりさせるため、以下の例文を見られたい。

- (6) a. メアリーが ジョンを愛している（こと）。
- | | |
|----|-------------|
| 主語 | = 文法関係のレベル |
| 主格 | = 表層格助詞のレベル |
- b. メアリーは [s ジョンを愛している。]
- | | |
|------|-------------|
| (主語) | = 文法関係のレベル |
| (主格) | = 表層格助詞のレベル |
| トピック | = 機能助詞のレベル |

(6)aの最初の句「メアリーが」は文法関係の観点からは「主語」とであると解釈される。何故なら、「メアリー」は主語をマークする「が」でマークされているという事実と、表層格助詞の観点からは明らかに主格であるという事実に基づいているからである。一方、(6)bの「メアリーは」の「は」は、文法関係および表層格助詞ともに表面的にはその姿を現さないが、機能助詞という観点か

らトピックをマークする「は」であると解釈できるのである。つまり、文の主語あるいは主格が話題化された時、この句は「は」によってマークされ、元の無標の文の主語（あるいは主格）であったと解釈されるのである。

直接目的語をマークする名詞句（あるいは対格を持つ名詞句）が話題化される例も見てみよう。

- (7) a. メアリーが ジョンを 愛している (こと)。
 主語 目的語 =文法関係のレベル
 主格 対象格 =表層格助詞のレベル
- b. ジョンは [_sメアリーが 愛している。]
 主語 (目的語) =文法関係のレベル
 主格 (対象格) =表層格助詞のレベル
 トピック =機能助詞のレベル

(7)bの名詞句「メアリーは」の「は」は、機能助詞という観点からはトピックとして、表層格助詞という観点からは(表面的にそれ自体は現れていないが)対象格として解釈される。目的語（あるいは対象格でマークされた名詞句）が話題化されると、その語はトピックをマークする「は」でマークされ、目的語として解釈される。

日本語の統語現象として、主語をマークする名詞句（あるいは主格でマークされた名詞句）あるいは目的語をマークする名詞句（あるいは対象格でマークされた名詞句）が話題化された時、それらの名詞句をマークする「が」および「を」は表面上その姿を現さず、トピックをマークする「は」に取って代わられる。

さて、次に間接目的語をマークする名詞句（あるいは与格でマークされた名詞句）が話題化される例を観察してみよう。

- (8) a. ジョンが明にメアリーを紹介した (こと)。
 主語 目的語 = 文法関係のレベル
- b. 明に は [_sジョンが メアリーを 紹介した。]
 間接目的語 主語 目的語 = 文法関係のレベル
 与格 主格 対象格 = 表層格助詞のレベル
 トピック = 機能助詞のレベル

(8)bの句「明には」の「は」は、機能助詞の観点からはトピック、文法関係の観点からは間接目的語、表層格助詞の観点からは与格として解釈される。この例に限って言えば、文法関係、表層格助詞、そして機能助詞の3つのレベルの文法概念が全て表面上に現れている。

上の例に関連して、方向格あるいは場所格の「に」がマークする名詞句に話題化が起こると、この「に」はトピックをマークする「は」の前で随意的にその形を失うこともできるし、現れることもできるようだ。

- (9) a. パリに是非行きたい。
b. パリ に は [s是非 行きたい。]
 方向(目的)格 =表層格助詞のレベル
 トピック =機能助詞のレベル
c. パリ は [s是非 行きたい。]
 =表層格助詞のレベル
 トピック =機能助詞のレベル
- (10) a. 日本に面白いものがたくさんある。
b. 日本に は [s面白いものが たくさんある。]
 主語 =文法関係のレベル
 場所格 主格 =表層格助詞のレベル
 トピック =機能助詞のレベル
c. 日本 は [s面白いもの が たくさんある。]
 主語 =文法関係のレベル
 主格 =表層格助詞のレベル
 トピック =機能助詞のレベル

なお、表層格助詞の中で起点格「から」、(場)所格「で」、着点格「まで」、比較格「より」などでマークされた名詞句が話題化されると、それらの表層格助詞はそのままの形で残り、トピックをマークする「は」はそれらの句に単に付加される形になる。これらの名詞句の話題化の例を以下観察されたい。

そして、現存する2つの概念と提案した概念の3つを有機的かつ有効に使うことによって、日本語の話題化現象をより納得のいく、より整合性のある説明をするということが可能となった。特に日本語の主語および目的語の話題化の説明をする際に新しい文法概念の導入は有効であることを論じた。

3. 形而上学的文法（文文法と談話文法の枠組みを超えて）

一般論として、チョムスキー (Noam Chomsky) が提唱し、発展させてきた生成（変形）文法は、文文法という観点から世界中の言語の主要な文の構造の分析に実りある成果を残した言語理論として特徴づけることができる。事実、世界の中の多くの言語の重要な新事実がこの理論体系を通して報告されており、生成（変形）文法はある意味においては成功裏であったと言えよう。この成功裏にあやかって、日本語においても実に多くの新事実が発見されたと言っても過言ではない。しかし、過去の生成（変形）文法の歴史を振り返れば、文法枠組みの中核の働きを担う文文法だけでは言語事実を的確に説明するには不十分であるという指摘が繰り返されてきた。つまり、文文法に多大な影響を及ぼしている談話文法の必要性に気づき始めたのである。その結果、文文法を補い、また支持する考えが言語学の分野で台頭し始めた。事実、過去二十数年の間にこの新しい考え方の応用を通して更に多くの言語事実を発見するに至ったのである。

本節では、文文法と談話文法の2つの文法概念だけでは言語事実を十分に、しかも納得のいくような形で説明し切れないこと、従って言語事実をより適切にしかも整合性があり納得のいくような形で説明するには新しいタイプの文法概念の導入が必要であることを言語データを通して指摘し、提案する。

新しいタイプの文法概念の必要性の対象となる例として、「独り言」、「想像」、「夢の中で使われる一連の言語表現」、「メタファー」などを挙げるができる。これらの一連の言語事象の特徴は、談話文脈なしでも言語表現化が可能であり、談話文脈なしで使用された言語表現はれっきとした言語データであるということだ。結論を先取って言うと、これらの言語表現が可能であるということは、これらの言語表現が先に振れた2つの文法概念が投影 (project) されたもの、あるいは形而上学的な文法概念であると仮定すれば、談話文脈なしに、あるいは文文法における文の生成が可能になるということに説明がつくからである。従って、これらの一連の言語表現が可能になるという事実を効果的

に説明するために「形而上学的文法」という新しい文法概念を提案し、それを支持する議論を展開していくことにする。なお、この用語の使用の正当性として、自然科学の様々な分野で「形而上学的理論 (Meta-Theory)」、「形而上学的論理 (Meta-Logic)」、「形而上学的物理学 (Meta-Physics)」などのような用語が実際に使用されているという事実を挙げることができる。従って、この新しい文法概念を以下のように提案したい。

- a. 文文法
- b. 談話文法
- d. 形而上学的文法

下の2組の例文は、上の3つのうちのどのレベルの文法枠組みによっても発話および分析が可能であるということを示す。つまり、文文法の枠組みでも、談話文法の枠組みでも、あるいは形而上学的文法の枠組みでも分析が可能である。(ただし、例えば、形而上学的文法の枠組みの中でのそれらの文のスタイルは(12)-(13)で示したものと幾分違うことが予想される。その理由は、例えば「独り言」のような場合には文末に終助詞(「…なあ」とか「…(な)んだ」など)を付け加える可能性もあるからである。)

- (12) a. 雨が降っている。
b. さっき地震がありました。
c. 松井がホームランを打った。
d. あ、トンボがとんで(い)る。
- (13) a. 鯨は哺乳動物である。
b. 人間は考える葦だ。
c. 太陽は東から登る。

このように、新しいタイプの文法枠組み(つまり、形而上学的文法)を仮定することによって、「独り言」、「想像」、「夢の中で使われる一連の言語表現」など、談話文脈なしで用いられる言語表現をより自然な形で説明することができるのである。

本節では、より多くの言語データを適切にしかも整合性のある形で説明するには新しいタイプの文法概念「形而上学的文法」が必要であるということを主張した。

4. 曖昧さに対する説明能力

本節は、Part Iで議論された「が」および「は」の複数の機能から生じる曖昧さを説明するために設定した。

Part Iでも振れたように、下の例文の「が」は2通り（主語をマークする「が」と焦点をマークする「が」）の意味に解釈できる（つまり、曖昧である）ということを観察した。

(14) a. ジョン が 学生だ。

主語

焦点

a) 主語: *John is a student.*

b) 焦点: *It is John who is a student.*

同じく Part Iでは、上の文型とは違った主語をマークする「が」によってマークされた文型（慣用的表現と分裂文は除く）も焦点をマークする「が」として解釈される可能性のあることを示した。焦点をマークする「が」の解釈が可能な時は、「が」は発話者によって普通より高いイントネーションで発音される。このことを念頭に次の例を観察されたい。

(15) a. 誰が来ますか。

主語

焦点

b. 友達がきます。

主語

焦点

(16) a. ワインとビール、どちらの方がおいしいですか。

主語

焦点

b. ワインの方がおいしいです。

主語

焦点

(17) a. 何語が一番難しいですか。

主語

焦点

b. 日本語が一番難しいでしょう。

主語

焦点

(18) a. 雨が降っています。

主語

焦点

b. さっき地震がありました。

主語

焦点

c. 松井がホームランを打った。

主語

焦点

d. あ、トンボがとんで (い) る。

主語

焦点

(19) a. 田中さんが買った車

主語

焦点

b. 山田さんが書いた論文

主語

焦点

(20) a. 田中さんが引っ越したので、寂しくなりました。

主語

焦点

b. 田中さんが引っ越したから、寂しくなりました。

主語

焦点

c. 田中さんが引っ越したため、寂しくなりました。

主語

焦点

d. 田中さんが引っ越したら、寂しくなりました。

主語

焦点

e. 田中さんが引っ越すまで、寂しくありません。

主語

焦点

これらの多くの文型の主語は、主語をマークする「が」の機能と焦点をマークする「が」の機能の2つの機能を同時に持つことになり、これらの2つの機能のために曖昧に解釈できるのである。

「は」にも曖昧に解釈できる例文が存在する。「は」の場合は3つの異なった機能(トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、そして対比をマークする「は」)があるということをPart Iで観察したので、それらの3つの機能のうち、2つあるいは3つの機能全てが曖昧に解釈できる文も存在する。例えば、次の例文を見られたい。

(21) 男はつらい。

?

この名詞句「男は」の「は」は、発話者の発話時点の文脈のありようで上に示された3つの機能のうち、どの解釈を受けても不思議ではない。例えば、一般的に言って、「男(というものは)つらい」のような時には、トピックになるだろうし、何の文脈も無しに「独り言」として言う時には総称になるだろう。何故なら、「男」は Kuno (1973) が主張するように総称名詞だからである。あるいは、「男はつらいよ」という映画のタイトルとして使われているような場合はどうであろうか。日本の長い歴史や文化を考えた時、どうも男性は世の中で生きる際に女性に比べるとかなりつらいことがたくさんあるというようなメッセージがこのタイトルから伝わってきはしないだろうか。もしそうであるならば、この「は」は言外にある「女性」と対比されているということになる。このように、「は」の機能は、「は」によってマークされる名詞の種類や文脈によって3つの機能のうちどの機能としても解釈できるという曖昧な性質を持っている。

この事実は、3つの機能が統語論上において意味がかなり近いことを物語っている。それでは一体これらの3つの機能に共通する性質は何なのであろうか。統語論上意味が非常に近いということは、統語論上の特徴にその秘密が隠されているのではないだろうか。まず、トピックの構文はどうであろうか。トピックについて言えることは、このトピックの名詞句は他の残りの文の最も重要な情報として表されるという性質を持っている。

[木 は] [揺れている。]
トピック コメント

言語学では、上のような例を分析する時、[木は] がトピックで、[揺れている] がコメントとして説明される。トピックはその文の最も重要な情報を提供し、コメントはそのトピックについて「どうだ/どうである」という情報を提供する。然るに、総称をマークする「は」や対比をマークする「は」についてはどうであろうか。

下に示す例は、それぞれ総称をマークする「は」と対比をマークする「は」である。

- (22) a. 鯨は哺乳動物だ。[総称]
 b. 雨は降っていますが、風は吹いていません。[対比]

まず始めに、総称をマークする「は」をトピックの例と比較してみよう。

[鯨 は] [哺乳動物だ。]

この例文でもトピックの例文に施した説明がほぼ当てはまるのではないだろうか。つまり、トピック句に当たる「鯨は」は「鯨」が総称名詞であるということだけが違いで、コメントは「鯨は」を受けてどうであるということを示している。

さて次に、対比の例はどうであろうか。

[雨 は] [降っています] が、(風は吹いていません。)

この例でも、「雨は」の部分が他の名詞句（ここでは「風」）に対比はされているが、コメントについてのトピックを表していると言える。

上の議論が示すように、これらの3つの機能はそれぞれの名称が表すように微妙な意味の違いは持っているものの、統語構造上は非常によく似た性質を持っていると言える。上の議論を概念上わかりやすく図示すると、つぎのようになる。

- a. [木 は] [揺れている。]
 トピック コメント
- b. [鯨 は] [哺乳動物だ。]
 総 称 コメント
- c. [雨 は] [降っています] が、(風は吹いていません。)
 対 比 コメント

従って、本稿では総称をマークする「は」も対比をマークする「は」も共に

トピックをマークする「は」の特殊なケースであると見なすことにする。

この観察を直接に裏付けるような例が存在する。その例は「が」と「は」の両方を文中に同時に持った例である。このような例はどのような説明がなされるべきなのであろうか。

- (23) a. 太郎は長男で、次郎は次男です。
b. 太郎が長男で、次郎が次男です。
c. 太郎は長男で、次郎が次男です。
d. 太郎が長男で、次郎は次男です。

上の例では4つのタイプの文型でできている。1つの文型が2つの文で接続されて成り立っている。4つの各文型の解釈を試みよう。

まず、(23)aの文型についてであるが、この文型では2つの名詞が「は」でマークされている。これまでの議論で扱われてきた機能の1つ、対比をマークする「は」としての解釈も成り立つだろうか。どうもその可能性はありそうだ。何故なら、前文と後文を別々に考えればその可能性は否定できないからだ。しかし、この文型に総称の解釈の可能性は残されていない。何故なら、「は」でマークされた名詞は総称名詞ではないからだ。

次に(23)bの文型を検討してみよう。前文も後文も「が」でマークされている。これらの2つの「が」は恐らく主語と焦点を同時に持つ「が」と解釈できそうだ。主語をマークする「が」としての解釈も可能のようだが、適切な文脈を考えるために少し時間がかかりそうだ。

(23)cはどうであろうか。前文は「は」、後文が「が」である。(解説に同じ文型を使ってみた。)前文の「は」はトピックとも対比とも解釈が可能のようだ。しかし、どちらかと言うと、トピックとしての解釈の方が強く感じられる。後文の「が」は主語と焦点を同時に兼ね添えた「が」であろう。

(23)dはどうであろうか。前文が「が」、後文は「は」である。(これも同じ文型で表してみた。)前文の「が」は恐らく主語と焦点を同時に持つ「が」であろう。後文の「は」はトピックの可能性が高い。しかし、対比の可能性もある。

「が」と「は」には上の例が示すようにずいぶん複雑な面がある。その理由は「が」にも「は」にも統語論上意味が非常に近い複数の機能があり、なおかつ両

方の助詞が1つの文型に現れているからだ。しかし、これらの4つの文型に最も強く感じられる解釈を各文型の後に示してこの節を閉じることにする。

- (23) a'. 太郎は長男で、次郎は次男です。[対 比]、[対 比]
 b'. 太郎が長男で、次郎が次男です。[主語/焦点]、[主語/焦点]
 c'. 太郎は長男で、次郎が次男です。[トピック]、[主語/焦点]
 d'. 太郎が長男で、次郎は次男です。[主語/焦点]、[トピック]

5. 結び

本稿および Part I を通して、次のような主要な主張をした。

- a) 本稿の「が」と「は」についての仮説は普遍性を訴えるものであること。
- b) 主語をマークする「が」を立てることで実に多くの日本語の文型の主語が変則的な条件に頼ることなく自然に説明できること。
- c) 総記をマークする「が」は実は焦点をマークする「が」であること。
- d) 「機能助詞」という新たな統語論上の文法概念をもつことで「は」を含む文型の説明がより明らかになったこと。
- e) 「形而上学的文法」という新たな文法的枠組みを持つことで「独り言」のような談話文脈の設定を必要としない言語表現を無理なく説明することができること。

結果として、いくつか新事実が浮かび上がってきた。まず、「が」から始めよう。

「が」には主語をマークする「が」と焦点をマークする「が」の2つの機能があることが分かった。主語をマークする「が」を立てることによって、実に多くの日本語の主語を持つ文型が変則的な条件に頼ることなく自然な説明がなされることが明らかになった。これまで総記をマークすると考えられてきた「が」は実は焦点をマークする「が」であることも分かった。焦点という用語は総記という用語に比べより適切であり、しかも普遍性に訴える用語であることも示された。更にある種の文型では主語をマークする「が」は焦点をマークする「が」と同時に起こり、そこに曖昧さが生じることも明らかになった。

「は」については、トピックをマークする「は」、総称をマークする「は」、対

比をマークする「は」、そして強調をマークする「は」の4つの異なった機能が存在することが分かった。このうち、総称をマークする「は」と対比をマークする「は」はトピックをマークする「は」の特殊なケースであることも明らかになった。この事実はある文型を解釈をする際に曖昧さとして現れた。しかし、この微妙な意味の解釈の違いを母語話者は直感的に捉えることができる能力を持っていて、それらの微妙な違いを上手に使い分けしていると判断される。この事実が冒頭の仮説に掲げられた原則によって巧みに捉えられた。この仮説によって、日本語学習者はある一定の限られた時間での習得が可能となっていると言えるのではなかろうか。強調をマークする「は」は上記の3つの機能とは統語論的に異なったものであることも明らかになった。しかし、残念ながら強調をマークする「は」の詳細な研究については将来に期待することにする。

注

- 1) 「文法関係」という用語と「表層格助詞」という用語は本稿でははっきりと区別して使う。まず、「文法関係」という用語は、主語、(直接)目的語、間接目的語などを指し、「表層格助詞」という用語は、主格、対象格、与格、属格、奪格、場所格、方向格などを指す。何故これらの2つのタイプの用語を区別して使うかという説得力のある議論については、Shibatani (1978) を参照されたい。
- 2) 厳密に言えば、この一般論に一見逆行すると思われるような例が存在する。その存在を気づいていただくという目的でそれらのいくつかの例を以下に示すことにする。これらの例の指摘は、森川正博氏(Personal Communication)に依るものである。しかし、それらの例は本節の議論に直接大きな影響を及ぼさないものと判断し、本稿での議論は省略することにする。
 - イ) a. ジョンだけ来た。
 - b. ジョンだけが来た。
 - c. *ジョンがだけ来た。
 - ロ) a. ジョンはその本も読んだ。
 - b. ジョンはその本をも読んだ。
 - c. *ジョンはその本もを読んだ。

参考文献

1. Brame, M. 1976. *Conjectures and Refutations in Syntax and Semantics*, New York: Elsevier North-Holland.
2. _____. 1978. *Base Generated Syntax*, Seattle: Noit Amrofer.
3. _____. 1979. *Essays Toward Realistic Syntax*, Seattle: Noit Amrofer.
4. _____. 1988. "On the Nature of Cancellation," *Linguistic Analysis* 18: 3-4. p.182-193.
5. Brame, M. and Popova, G. 2002. *Shakespeare's Fingerprints*, Adonis Editions, U.S.A.
6. Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*, The Hague Morton.
7. _____. 1981. *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht, the Netherland: Foris Publication.
8. Kuno, S. 1973. *The Structure of the Japanese Language*, The Massachusetts Institute of Technology.
9. _____. 1978. *Theoretical Perspectives on Japanese Linguistics*, In Hinds and Howard (1978).
10. _____. 1978. *Discourse Grammar*, Taishukan.
11. Kuroda, S.-Y. 1965. *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Unpublished Ph.D. Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
12. _____. 1969. "Remarks on the Notion of Subject with Reference to Words like Also, Even, or Only, Part I," Annual Bulletin, Vol.4, Logopedics and Phoniatics Research Institute, Tokyo University.
13. _____. 1971. "Remarks on the Notion of Subject with Reference to Words like Also, Even, or Only, Part II," Annual Bulletin, Vol.4, pp.127-152, Logopedics and Phoniatics Research Institute, Tokyo University.
14. 三上 章. 1960. 象は鼻が長い、くろしお出版.
15. _____. 1972. 現代語法新説、くろしお出版.
16. _____. 1972. 現代語法序説、くろしお出版.
17. Morikawa, M. 1993. *A Parametric Approach to Case Alternation Phenomena*, Hitsujishobou.
18. 野田 尚史. 1996. 「は」と「が」、くろしお出版.
19. 大野 晋. 1987. 現代のエスプリ—日本語の本性—、至文堂.

20. Shibatani, M. 1977. "Grammatical Relations and Surface Cases," *Language* 53: 789-809.
21. _____. 1978. "Mikami Akira and the Notion of 'Subject' in Japanese Grammar," In Hinds and Howard (1978).
22. Takano, Y. 1986. "The Lexical Nature of Quantifiers in Japanese: Part II," *Linguistic Analysis* 16: 41-59.
23. _____. 1987. *Recursive Categorical Syntax of Japanese*. Ph. D. Dissertation, University of Washington.
24. _____. 1993. "Toward a Universal Account of Subject-Verb Agreement: Some Evidence from Japanese," *Memoirs of the Faculty of Education, Miyazaki University, Humanities Vol. 75*.
25. _____. 2000. *A Dichotomous Approach to Basic Japanese Grammar: The Predicates and Some Other Aspects*. Seizansha Publishing Company.

(留学生センター教授)